

## 週日の説教

金 大烈 神父 2009年4月16日(木)

### 《幼児の様に無条件にイエス様を信じましょう》

人間の歴史を振り返ってみますと、人間だからできることによって、人を困らせたことが結構ありました。

その中の一つは、疑う心です。"お互いに信じることができない。自分が生き残るために何とかその人を上手にだまさなければならぬ。"このような生き方が人間の歴史が始まってから今まで、そしてこれからも続けられると思います。だましあい、うそをつきあい、もし上手にそれができれば、金儲けができて何とか最後までこの世の中の生活を豊かにすることが出来るのかもしれませんが。

聖書をあちこち読んでみますと、イエス様の弟子達は、イエス様が殺されてお墓に葬られ、三日後に復活されたことさえ信じることができませんでした。イエス様は、「苦しみを受け、死んで三日後に復活する。」と何回もおっしゃったことを私たちはよく知っています。しかし、その人柄、振る舞い、教え、全てを経験した弟子達でさえそれを信じることができなかったようです。

動物は、警戒はしますが疑いません。警戒することと、疑うことの差は何でしょう。警戒するというのは、本能的に自分が壊れないように気をつけることです。疑うのは、自分の頭では納得ができないことです。"このようになってきたらあのようなになるはずなのに、この人はこのように言っている。だから信じられない。" ということ"疑う"、と言います。これは人間だけが持っている才能かもしれませんが。疑うことがあったから、今までの文明の発展が出来たのかもしれませんが。しかし、その疑う心が、正しく使われるならばあまり悔しくないかもしれませんが、人類の歴史では、疑いによって罪もない人々をよく殺してきました。ある意味では人間の罪であり、逆に言えば弱さかもしれません。畏かもしれません。しかし少なくとも、私たちが信じているこの信仰については、幼い子どもが親を何の条件もなしに信じることができるよう、私たちがイエス様のことを信じるように頑張らなければならないと思います。実際、そのように無邪気に無条件にイエス様に信頼感を持って祈られる信者の方々には、目に見えるいろいろな印が表れるのをよく体験します。

やはり私たちにもこのような疑いが生じるのは当たり前かもしれません。"神様は本当に私を愛しているのか。神様は本当に私のために自分の一人子を殺して復活させ、今も私たちの罪のために悩んでいらっしゃるのか。" 特に罪のない人々が責められるとき、神様がいらっしゃるのならこんなことはありえないのに、なぜ、と疑いを持つのは当然かもしれません。

しかし、十二弟子たちでさえ疑ったこと、しかもその中の1人は裏切ることまで出来たことを考えると、私たちは弱虫であっても希望が生じます。イエス様に直接会った人たちでさえ弱さがあったのなら、私たちも仕方ないのではないかと。そのように直接イエス様の生き方を見てきた人たちでも裏切り、最後に神様の助けによって本当に命をかけて信仰の証人になったことを考えると私たちにもしっかりと強くイエス様に近づく可能性があるのではないかと思います。

今日の福音(ルカ 24・35 - 48)を通して、復活というのは、ある日突然終わるものではありません。私たちは死ぬときまで、呼びかけられるときまで、その復活の体験を求めながら生きることが信仰の道ではないかと思います。

皆様も、全ての人間は同じ条件だと思います。みんな弱いです。その弱さから復活があることを感謝しながらこのミサを続けましょう。

ありがとうございました。